

榎本淳一・吉永匡史・河内春人

# 中国学術の東アジア伝播と 古代日本

六陣兵法一 八陣書一 陣法一 孫子兵法

序言

## I 中国における学術の形成と展開

佚名『漢官』の史料性格——漢代官制関係史料に関する一考察

前四史からうかがえる正統観念としての儒教と「皇帝支配」

——所謂外戚恩沢と外戚政治についての学術的背景とその東アジア世界への影響

王儉の学術

魏収『魏書』の時代認識

『帝王略論』と唐初の政治状況

唐の礼官と礼学

劉知幾『史通』における五胡十六国関連史料批評

——魏収『魏書』と崔鴻『十六国春秋』を中心に

兵書三 魏武 略解 魏祖

榎本淳一 4

楯身智志 7

塚本 剛 22

洲脇武志 35

梶山智史 50

会田大輔 65

江川式部 77

河内 桂 95

## Ⅱ 中国學術の東アジアへの伝播

六世紀新羅における識字の広がり

橋本 繁 108

古代東アジア世界における貨幣論の伝播

柿沼陽平 119

九条家旧蔵鈔本『後漢書』断簡と原本の日本将来について

小林 岳 137

—— 李賢『後漢書注』の禁忌と解禁から見る

古代東アジアにおける兵書の伝播 —— 日本への舶来を中心として

吉永匡史 149

陸善経の著作とその日本伝来

榎本淳一 162

## Ⅲ 日本における中国學術の受容と展開

『日本書紀』は『三国志』を見たか

河内春人 172

日本古代における女性の漢籍習得

野田有紀子 186

大学寮・紀伝道の学問とその故実について —— 東坊城和長『桂葉記』『桂林遺芳抄』を巡って

濱田 寛 199

平安期における中国古典籍の撰取と利用

河野貴美子 214

—— 空海撰『秘蔵宝鑰』および藤原敦光撰『秘蔵宝鑰鈔』を例に

わどがき

吉永匡史・河内春人 228

秘録十 全壇秘火二卷

孝子宝火一真人水

# 序言

榎本淳一

学術（学問・芸術・技術）は、文化のみならず、その時代の社会、支配のあり方を規定する力を持つており、歴史研究において重要な視点となりうるものである。各時代・各地域の学術の動向・内実を知ることにより、その時代・地域の歴史の本質に迫ることも可能と考える。本書は、そのような学術が、中国で生み出された後に、如何にして東アジア地域に広がり、とりわけ日本においてどのように受容され展開したかを明らかにしようとするものである。言い換えるならば、日本を中心に、中国文化を共有する「東アジア文化圏」の実態解明を目指すものとも言えるだろう。

西嶋定生氏は、漢字・儒教・漢訳仏教・律令制という四つの中国文化を共有する地域（中国・朝鮮・日本・ヴェトナム）を「東アジア文化圏」と規定し、この文化圏には完結した政治構造があるとした。その政治構造とは、中国皇帝と周辺地域の国王・族長が君臣関係を取り結ぶ国際的政治体制Ⅱ「冊封体制」であったとする。「東アジア文化圏」は中国文化圏、漢字文化圏とも言い換え可能であるが、特に文化圏と政治圏の一致に着目して「東アジア世界」という歴史的世界としても捉えている。西嶋氏の「東アジア文化圏」論、「東アジア世

界」論、「冊封体制」論は、日本の歴史展開を国際的環境から捉える理論として、また東アジアの歴史を総体的に描く手法として、戦後の日本史研究、東洋史研究を牽引する役割を果たした。

現在では、西嶋氏の諸理論は様々な批判を受け、東アジアより広い領域から歴史を把握するという「東部ユーラシア」論が提唱されている。「東アジア世界」は完結した歴史的世界であると西嶋氏は主張されたが、実際にはその外部との交流・衝突が大きな作用・影響を及ぼしていたことは明らかであり、その点大きな見直しは必要であり、「東部ユーラシア」論が台頭したことも理解できる。しかしながら、中国文化を共有するという東アジア地域の特殊性は無視することはできず、「東アジア文化圏」という概念は今なお有効であると考えられる。

なぜ、東アジア地域のみが長らく中国文化を共有し続けたのか、中国文化を共有することによどのような歴史的意義があったのか、「東アジア文化圏」という概念は東アジア地域の特殊性を明らかにすると共に、中国・朝鮮・日本・ヴェトナムの歴史的関係性を考える上で最も重要な視点となり得るものと信じる。なお、西嶋氏は、共有された中国文化を漢字・儒教・漢訳仏教・律令制の四つに限定されたが、史学・文学・兵学・曆学・医学などの諸学、音楽・囲碁・製紙・建築・絵画などの諸芸・諸技術という、広く中国文化が共有されたと考えるべきであろう。本書ではその全てを取り上げることができず、日本を中心に据えることになるが、中国文化の内容をより広く捉え、その共有の実態を考えることにしたい。

本書は十六本の個別研究から成り、三部構成をとっている。第一部では中国における学術の形成と展開、第二部では中国学術の東アジアへの伝播、第三部では日本における中国学術の受容と展開というテーマを取り上げ、中国の学術の生成から展開、その東アジアへの伝播、影響を歴史的に捉えうる構成としている。扱っている学術は、礼・小学・正史・職官・簿録・儒・雑・兵・別集・総集（以上は、『隋書』経籍志の分類による）のほか経済・仏教などにも及び、「東アジア文化圏」論では漏れ落ちた学術にまで視野を広げている。個別の学術を対象とするもの、時代を代表する学者やその学術の全体像を対象とするもの、中国文化受容・展開の具体相を対象とするものなど切り口も多彩であり、中国学術の歴史的展開を多面的に捉え得るようになってい

た、ヴェトナムは欠くが、中国・朝鮮・日本と「東アジア文化圏」を意識したフィールドを設定している。執筆は、若手からベテランまで年齢層に幅をもたせ、それぞれのテーマで現在考え得る最適の方々をお願いした。本書が、東アジアの歴史を総体的に捉える研究の一助となり、「東アジア文化圏」論の再評価・再検討につながることを願うものである。編者の意図は以上の通りであるが、本書にも不足・不備するところが少なくないと思われる。それは全て編者の責任であり、厳しいご批判・ご指摘をお願いしたい。

本書の執筆者の大半は、「学術と支配」研究会のメンバーである。先に、『古代中国・日本における学術と支配』（同成社、二〇一三年）として研究成果を問うているが、本書はそれに次ぐものである。今回は研究会メンバーではカバーできない部分について、河野貴美子氏と梶山智史氏、榎身智志氏に助力を仰いだ。極めてご多忙中、ご寄稿頂いた三氏には心から感謝申し上げます。また、出版情勢の厳しい中、本書の出版を快くお引き受け下さった勉強出版、編集事務を取り仕切って頂いた同社編集部部长の吉田祐輔氏にお礼申し上げます。

編者を代表して

二〇一九年十一月